２０２６年度

湘南白百合学園中学校

入　学　試　験　問　題

国　　語

１教科入試　６０分

受験番号		氏名	

〇受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

一

後の問いに答えなさい。

＊答えは解答用紙に書きなさい。

問一　次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

①　雑穀米と白米を比較する。　②　まさにけがの功名だ。　③　晴耕雨読の生活にあこがれている。

④　生成ＡＩが台頭する。　⑤　最後の気力を奮う。

⑥　コウブツ資源が豊富だ。　⑦　頬がコウチョウする。　⑧　学級委員にリッコウホする。

⑨　日本のキカン産業を守る。　⑩　文章をカンケツにまとめる。

問二　次の詩「ＺＯＯ」（＝動物園）の［　　］にあてはまる動物の名を答えなさい。この動物は、「イソップ物語」の中で、争いをしている動物たちに、その時々で都合のよい話をしますが、結局はどの仲間にもなれず、独りきりになってしまうものとして描かれています。

ＺＯＯ
僕達はこの街じゃ　夜更かしの好きなフクロウ
本当の気持ち隠している　そうカメレオン
朝寝坊のニワトリ　徹夜明けの赤目のウサギ
誰とでもうまくやれる［　　］ばかりさ
見てごらん　よく似ているだろう　誰かさんと
ほらごらん　吠えてばかりいる　素直な君を
（中略）
ほらね　そっくりなサルが僕を指さしてる
きっと　どこか隅の方で僕も生きてるんだ

（辻仁成『辻仁成　青春の譜　ＺＯＯ』）

問三　次の【A】・【B】は、もとの文章からそれぞれ段落の順番を入れ替えています。1～5を正しい順番に直し、その番号を答えなさい。

【A】

1　それが＊1太陽の塔でも当方はすんなり受け止めたろう。＊2凡俗の身に芸術は難しい。

2　売れない画家が芸術の神髄を説く。「美とは、芸術家が世界の混沌から魂を傷だらけにして作り出す素晴らしいなにか、常人がみたこともないなにかなんだ」。

3　太陽の塔が重要文化財に指定される運びとなった。岡本太郎の誕生が半世紀遅れていたらと夢想する。時間が逆行したかのように侵略戦争が起き、超大国の自国第一主義が国際秩序を乱す。そんな時代に対する異議申し立てとして、逆に進歩と調和への渇望を主題とする作品を今回の万博に出していたかもしれない。

4　あの造形の意味を当時の小学生に説明できた大人は周囲にいなかった。大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」に反発する意思を、作者が異形の像に込めていたと知ったのは後年のことだ。

5　だから「万人にわかるものじゃない」と。サマセット・モーム『月と六ペンス』（金原瑞人訳）である。1970年大阪万博のシンボルだった岡本太郎の「太陽の塔」も例に漏れない。

（注）＊1　太陽の塔……日本万国博覧会（1970年に開催）のテーマ館の一部として岡本太郎が制作した、高さ70㍍の芸術作品。

＊2　凡俗……ありきたりであること。

【B】

1 幼虫が育つきれいな水を保つ土地では、光の筋が暗闇に浮かぶ時節になった。岡山県真庭市の北房地域ではゲンジ、ヘイケ、ヒメ、オバという4種類のホタルが人の手で守られている。

2 漱石が小川に落ちたのは手に明かりを持たず暗かったからだろう。観賞の手本である。

3 ホタルを追っているうち不注意にも水に落ちたのだろうか。「落しけり」とホタルのせいにしているところがおもしろい。帝国大学英文科に学んでいたころの作句である。当時はホタルの乱舞する場所が東京にも珍しくなかったことを物語っている。

4 ヒメはヘイケより体がちっちゃく、オバは発光が弱いそうである。見物するにしても繊細な接し方が必要なのかもしれない。飛び交う前の先月、地元保存会が川に沿って計150㍍の遮光幕を設置したとする記事を読んだ。ホタルは人工の光である車のライトや懐中電灯、スマホの明かりを嫌がるためだという。

5 夏目漱石は正岡子規に俳句を習っていた。手紙に書いて送り、添削してもらうこともあった。1891年(明治24年)8月の手紙に、つぎの一句を残す。〈蛍狩われを小川に落しけり〉。

(【A】読売新聞「よみうり寸評」2025・5・19夕刊)

(【B】読売新聞「編集手帳」2025・6・25朝刊)

問四　次の（1）（2）の問いに答えなさい。

（1）熟語の構成が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　早春　イ　軽視　ウ　確認　エ　公営

オ　予想　カ　再会　キ　降雪　ク　世論

（2）次の文の――線部を言いかえる場合、□にあてはまる三字の熟語を後の漢字を組み合わせて答えなさい。

このアプリを使うと合唱のリズムがぴったり合うなんて、めっちゃやばいね。

←〈言いかえる〉

このアプリを使うと合唱のリズムがぴったり合うなんて、□だね。

［知　期　恵　賞　心　案　的　秀　考　感　優　画　状］

問五　次の新聞記事の文章、および資料1・資料2を見て、後の（1）～（5）の問いに答えなさい。

次ページに続く

ＡＩ近未来

アニメ「進撃の巨人」のエレン役などを務める人気声優の梶裕貴さん(39)は数年前、ＡＩ(人工知能)が生成した自身の声が歌う音声をネットで聞いた。許可した覚えはない。

「仕事の性質上、知らないところである程度の情報操作をされてしまうことは覚悟していたが、実際に接するとやはり①不気味で気持ち悪かった」と振り返る。

ネット上には、声優や歌手の声を無断でＡＩに学習させて生成した声(無断生成ＡＩ)を使った動画が氾濫する。多くの声優が所属する日本俳優連合(日俳連)の2023～24年の調査では、約270作品で被害が確認され、梶さんは声優別では最も多かった。

無断生成ＡＩは声優にとって死活問題だ。だが、音声には著作権の保護が及ばず、声をＡＩに学習させることは違法とされない。18年の著作権法改正でも、著作権者の許諾なしでＡＩに著作物を学習させることが認められてしまった。音声業界などは許諾を必須とするよう、著作権法の再改正を求めてきたが、法の不備は放置されたままだ。

そこで日俳連などは昨秋、ＡＩ音声(ＡＩで生成された声)の学習・利用に関し、アニメなどの吹き替えでは使わないことや、本人の許諾を得ることなどを求める声明を出した。声優らは並行し、②「＊1ＮＯ ＭＯＲＥ無断生成ＡＩ」運動を展開。動画で憤りや困惑を訴えた。日俳連の広報委員長で、アニメ「ちびまる子ちゃん」のおばあちゃん役などを務める佐々木優子さん(63)も動画で「声優の声は努力を重ねて作り上げたもの。無断で切り貼りされて気持ちのいい人はいない」と明かした。運動の効果については、「理解は広がったが構わず作り続ける人もいる」と嘆く。

声優の権利法に不備

米国や韓国などで生成ＡＩと音声に関するルール作りが進む中、経済産業省は今年、③無断生成ＡＩで起こす目覚まし時計の製造・販売などが、正規品と混同させるような行為を禁じた不正競争防止法に違反する恐れがあるとする判断を公表した。明治大の今村哲也教授(知的財産法)は「現状で取り得る最大限の法的解釈を示し、業者に刑事責任が問われる可能性を意識させる」と評価。それでも、法的に声の権利を確立させる必要性を主張する。

一方、④ＡＩ音声を本人の同意を得て正規利用する動きも広がる。音声合成を行う「ＣｏｅＦｏｎｔ」(東京都)は昨秋、声優事務所「青二プロダクション」(同)と提携。野沢雅子さんら10人の、英語や中国語などのＡＩ音声を販売する。音声案内などでの利用を想定し、吹き替えといった演技には使わない。ＣｏｅＦｏｎｔの山田泰裕・ＰＲマネージャーは「声優に収益を戻しつつ、声の可能性を高める一歩」と話す。

梶さんも昨年、⑤自身の声をＡＩで合成するソフトを商品化。様々な人が使うことで、まったく新たなものが創造されると期待する。

「新技術は悪用する人が問題。誰も傷つかない前向きな使い方を示したかった」と振り返る。

驚異的な速度で進化し、利用される生成ＡＩ。日俳連なども、声優の声の＊2データベースを作り、正規のものを流通させる仕組み作りに向け動いている。佐々木さんは「ＡＩで使わないでと言っても解決しないので、現実に対応する」と無念を語り、将来を危ぶむ。

「声優の声とＡＩ音声のすみ分けが理想だが、声優が担う表現の部分も、いずれＡＩが担う部分が増え、⑥新人が業界に入りにくくなるのは確かだ」

注＊1 ＮＯ ＭＯＲＥ……もうやめて。

＊2 データベース……コンピュータで利用できるように、情報を収集・整理したもの。

資料１

音声や肖像のデジタル複製に関して商業目的での無断使用を禁じる米国の法律

	保護の対象	違反した場合	違反とならないケース	法律の状況
連邦議会	すべての故人と生存者	最低5000ドルの損害賠償	ニュース、スポーツ報道、学術研究など言論の自由を定めた憲法修正第１条の保護対象となる使用	2025年４月に法案提出
テネシー州		民事訴訟の対象に		24年７月施行
イリノイ州				25年１月施行
カリフォルニア州	故人	最低１万ドルの損害賠償		26年１月施行
	雇用されたパフォーマー	デジタル複製の使用禁止	雇用契約時にパフォーマーが弁護士か労働組合を介し、デジタル複製の使用に合意した場合	25年１月施行
ニューヨーク州	故人の著名人、パフォーマー	最低2000ドルの損害賠償	無断使用と明示した上での使用や生演奏以外のパフォーマンスなど	21年５月施行

（注）＊故人……亡くなった人。
＊パフォーマー……表現活動する人。

資料２

韓国と日本の音声に関する規制

韓国	2022年施行の法律で著名人の音声などの無断使用は不正競争行為に該当。経済的損失が発生した場合、損害賠償を請求できる
日本	ＡＩによる著名人の音声の無断生成・利用を巡り、経済産業省が不正競争防止法違反の恐れがある具体的例を提示

（読売新聞　2025年６月11日朝刊）

（1）――線部③「無断生成ＡＩで起こす目覚まし時計の製造・販売などが、正規品と混同させるような行為を禁じた不正競争防止法に違反する恐れがあるとする判断」とありますが、この判断からわかる法律的な考え方として、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　無断生成ＡＩ音声の利用は、すべて違法となる新たな法的解釈を示そうとしている。

イ　声優の声を知的財産として法的に確立することを目的にしようとしている。

ウ　音声データそのものが著作権を有するものであることを明確にしようとしている。

エ　著作権法では不十分な部分を、すでに制定されている他の法律で補完的に対応しようとしている。

（2）日本俳優連合の声明と並行して声優らが、――線部②「『ＮＯ　ＭＯＲＥ無断生成ＡＩ』運動を展開」する一方、音声合成を運営する企業が声優事務所と提携して、――線部④「ＡＩ音声を本人の同意を得て正規利用する動き」も紹介されています。これら二つの異なる取り組みに共通する、根本的な目的はどのようなことだと考えられますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　声優の声に権利を与え、声優側に収益がもどされる仕組みを構築すること。

イ　声優の肉声による演技の芸術性を、ＡＩ音声よりも上位に位置づけること。

ウ　声優の声をすでに制定されている著作権法で保護できるよう、法改正を強く求めること。

エ　声優業界からは、容易に情報操作されてしまうＡＩ技術を完全に排除すること。

（3）人気声優の梶裕貴さんは、自身の声が無断生成ＡＩとして利用されたことに、――線部①「不気味で気持ち悪かった」と振り返りながらも、――線部⑤「自身の声をＡＩで合成するソフトを商品化」しています。この一見矛盾するような行動について、記事から読み取れる理由として、最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　新技術を否定するのではなく、その悪用を防ぎ、誰も傷つけない利用法を自ら示すことを目的としたから。

イ　ＡＩ音声に反対しているが、新しい時代に対応する柔軟なエンターテイメント性が求められているから。

ウ　ＡＩ音声の脅威に対抗するため、自らもＡＩビジネスの中心に参入せざるを得なかったから。

エ　自分の声を無断で使われることへの対抗策として、合法的なＡＩ音声商品を市場に流通させようとしたから。

（4）日本俳優連合の広報委員長である佐々木優子さんは、将来について、――線部⑥「新人が業界に入りにくくなるのは確かだ」と心配しています。その直接的な原因として述べられている最もふさわしいことを次から選び、記号で答えなさい。

ア　声優の人気が高まる現代において、いまだに声優の声を守る法律の整備が進んでいないこと。
イ　声優が担ってきた表現の役割が、将来的にＡＩによって代わられていく可能性が高いこと。
ウ　正規のＡＩ音声データベースの整備が遅れているため、業界の収益構造が不安定になること。
エ　無断生成ＡＩ音声の存在が、声優を目指す人々の意欲や関心、行動力を低下させること。

（5）資料１・資料２について、次から誤りのある内容のものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　商業目的のデジタル複製の無断使用を禁じたニューヨーク州法は、故人の声や肖像が対象で、生存者は対象外であるとの解釈が成り立つ。
イ　米国の各州の中には音声や肖像の保護規定が設けられ、テネシー州ではすべての生存者と故人の権利を守る法律を２４年から施行している。
ウ　著名人の音声の無断使用について、韓国は不正競争行為として法規制しているが、日本は経済産業省から違反の可能性があると示すにとどまっている。
エ　連邦議会の規制はまだ法案提出の状況だが、無断使用と明示した場合や言論の自由で保護すべきものもふくめ、すべて対象としている。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《*1アイヌである幸恵は、アイヌ語研究者の金田一とその息子の春彦とともに平和博覧会を訪れていた。》

小一時間ほど列に並び、南洋館で南洋人の歌劇を観た。

黒い肌の子供たちが太鼓の音に合わせて歌い踊る。満員の客が太鼓の音に合わせて手拍子をすると、南洋人の子供たちは何とも得意げに胸を張った。

会場は暖かい笑い声に包まれて、女たちの「かわいい！」という歓声が聞こえた。

出し物が終わると、そこかしこから小銭を紙で包んだおひねりが飛び交い、それを南洋人の子供たちが満面の笑みで拾って回った。

南洋館を出たら日が暮れ始めていたので、*2静江からもらった〝お小遣い〟で、春彦と二人、いちごの味の氷水を飲んだ。

疲れ切った身体に真っ赤な甘い氷水が染みわたる。うっとりするくらい美味しかった。これこそ命の水だと思った。

「幸恵さん、見て見て、真っ赤になっちゃった！」
「まあ、ぼっちゃん、私も一緒ですよ」
春彦と赤くなった舌を見せ合いながら樺太館と満蒙館へ向かったが、そろそろ勤め帰りの人がやってきたのか、先ほど前を通ったときよりもはるかに長い列ができてしまっていた。
「僕、並ぶのはもう嫌だ。それよりもアイスクリームが食べたいな」
長い列を目にした春彦は、急に疲れを感じたようにその場にしゃがみ込んだ。
「私が買ってきますよ。お父さまと一緒に休んでいらしてくださいね」
少し先に進んだところに、大きな氷に囲まれたアイスクリームを売る屋台があった。
ベンチに腰掛けてぼんやりと疲れに浸った顔をした春彦と、煙草を燻らせた金田一に手を振って、急ぎ足でアイスクリームの列に並ぶ。
ようやくひとりになって、ほっと息をついた。
あんなに甘い氷水を飲んだばかりなのに、さらに甘いアイスクリームを食べたがる春彦に、子供とは逞しいな、と小さな笑いが込み上げる。
案じていたよりも、ずいぶんと身体の具合が良いのが嬉しかった。
辺りはすっかり暗くなっているのに、目の前のものがいつもよりよく見えた。
不忍池の水面にさまざまな色の灯りが映ってゆらめいている。
うっとりするほど美しい眺めだった。きっと物語で読んだロマンチック、というのはこういう光景のことを言うのだろう。
たったひとりでいるのに誰かに恋をしているような心地がする。この時が永遠に続けばいいのにと思った。
ようやく東京の良い思い出ができた。思い残すことはない。
心からそう思った。
紙皿に載せたアイスクリームを手にベンチに戻ろうとしたとき、自分を呼ぶ声を聞いた。
「幸恵さん！」
はっとして振り返ると、真っ白なワンピース姿の百合子が腕を前で組んで立っていた。
「百合子さんでしたか。驚きました」
アイスクリームが溶けてしまわないか気にしながら言った。
「約束を破ったわね。博覧会は一緒に行こう、って言ったじゃない」

百合子は悪戯っぽく笑った。

*3あの日、百合子に陰口を聞かれてしまったと気付いた金田一は、相当*4狼狽していた。

百合子がすべては聞き間違いだったと思い込んでくれるのを祈るように、①普段よりも陽気に振舞ったり、道化のようにはしゃいでみせた挙句、百合子が帰る頃には観念したように不機嫌になった。

もっとも、強張った雰囲気の中で平然と居座って無駄話を続け、夕飯まで平らげて行った百合子には、いったいどうしてこんなに肝が据わった嫌味な振舞いができるのかと驚いたが。

当然、あれから百合子は一度も金田一の家を訪れていなかったし、金田一が百合子の話をすることもなくなった。

幸恵のほうから話題にできるはずもなく、百合子の存在はまるで最初からどこにもなかったかのように、金田一家から消えた。

「あの時は、すみません。先生に何も言えなくて……」

素直に謝った。

「そりゃ、そうよね。幸恵さんは悪くないわ」

百合子は困り果てた金田一の顔を思い出したように、くすりと笑った。

「今日、百合子さんはお一人でいらしたんですか？」

「仕事で来たのよ。ついさっき編集者と別れたところ。この博覧会の大成功を宣言する提灯持ちの記事を書いて欲しかったみたいだけど。それなら②私に頼んだのが大きな間違いね」

不忍池の光り輝く水面に、値踏みするような目を向けた。

「どんな記事を書かれるおつもりですか？」

アイスクリームが溶け始めている。早く戻らなくては。

「つまらないわ。*5モダーンの意味を履き違えて、ただの西洋の真似にすぎない。ごたごたで*6雑駁。それに平和なんて名ばかりよ。きっとこの博覧会は近い未来に、この時代の日本人がどれほど浅はかだったかを知らしめるものとなるはずよ」

百合子が得意げに鼻先をつんと上げた。

幸恵は思わず笑みを浮かべた。小気味良いほどの毒舌はいかにも百合子らしかった。

「そうでしたか。私にはとても楽しいものでしたが」

③気の置けない調子で応じた。

「あなた、北海道館に行っていないわね。すぐわかるわ。だからそんなことが言えるのよ。北海道館でアイヌがどんなふうに紹介されているのか、教えてあげましょうか？」

すかさず百合子が噛みついた。

「北海道館、知っていましたとも。知らないはずがありません」

南洋館での、黒い肌の子供たちの踊りを思い出す。「南洋土人とはなんてかわいいものでしょう」と口々に言い合う客たち。

樺太館、満蒙館、朝鮮館、そして北海道館。

この平和博覧会での南洋〝土人〟の扱いを見れば、北海道館の中でアイヌたちがどのように紹介されているかは察することができた。

だが幸恵は、金田一と春彦が北海道館に入りたいと言ったら、喜んで一緒に行こうと思っていた。

――ああ、故郷が懐かしいです。

――まあ、こんなものは違いますよ。

今の私ならば、顔色一つ変えずにそんなふうに軽口を叩きながら、北海道館を隈なく見て回ることができる。

「④幸恵さん、あなた悔しくないの？　滅びゆくアイヌを[*7]和人に伝えるために、神に遣わされた乙女。そんなふうにいいように持ち上げられて振り回されて。でも幸恵さんの[*8]ユーカラに集まる男たちは、みんなあなたを自分たちと同じ一人の人間だなんて――」

「もう、あまり私を傷つけないでくださいませ。百合子さんの思想と、私という者の人生は別のものです」

強い口調で遮った。

「百合子さんは、ご自身の信じた道を進まれればよろしいでしょう。百合子さんの抱えた怒りに賛同して立ち上がろうという若い女性は、きっとこれからたくさん現れます」

「あなたは違うの？　一緒に立ち上がってくれないの？」

百合子がどこか縋るような顔をした。

「私には時間がありません」

この人生が終わる日が来るなんて想像もできなかった娘の頃、私はひたすら自身の使命を追い求めていた。この身を、この知識を、この才能を、長い間虐げられ苦しみ続けたアイヌ民族のために捧げたいと思った。

ユーカラをローマ字で書き留めること。わかりやすい日本語に訳すこと。東京で金田一のアイヌ語研究に協力すること。どれも自分にしかできない仕事だと信じて全力で取り組んだ。

だが――。

「持病が悪化しているんです。私は近いうちに死にます」

百合子の顔が歪んだ。

「縁起でもないことを言わないでちょうだい。誰だって死ぬのよ。私だってね」

⑤百合子は負けてたまるかという様子で、強い目で睨んでくる。

気付くと百合子の傍らに灰色の靄が見えた。

百合子と横幅も縦幅もちょうど同じくらいの大きさ。これまで見た中でいちばん大きな靄だ。

どんどん靄が広がって視界が真っ暗になってしまうのではと身構えたが、靄はその大きさのままちらちらと左右に揺れている。

「このところ、灰色の靄が見えるんです」

幸恵が指さすと、百合子が少しも臆することなく指さしたところに顔を向け、「どういうこと？　何もないじゃない」と首を傾げた。

「幼い頃、祖母から、人は死ぬ前になるとあの世とこの世の境目で暮らすようになると聞きました。うんと長く生きた年寄りは、兎の神様とお喋りをしたり、梟の神様と山を散歩したりしながら、少しずつあの世に近づいていくんです」

「*9カムイ・ユカラの話ね。子供と年寄りは死に近いから大人には見えないものが見える、というのは、アイヌだけではなくて世界中のさまざまな文化で言われていることよ。幸恵さんにもそれが見えるっていうの？　それは良くないわ。きっと慣れないこちらでの生活で神経衰弱になっているのよ」

「いいえ、頭ははっきりしております。長く生きていますと、ああこれがそのことだ、とはっきりわかるんです」

幸恵は首を横に振った。

「長く生きている、って、あなたまだ十九でしょう？」

「私にとっては長い長い道のりでした」

二人でしばらく見つめ合った。

「できれば来月に、遅くとも九月には北海道に帰ります。ここでの私の役目はもう終わりました」

もう立ち去らなくてはというように、溶け始めたアイスクリームを示した。

「まだ終わっていないわ。良い医者ならばいくらでも紹介してあげる。幸恵さん、あなたが本気でこの世界と向き合うなら、アイヌ民族の未来を背負って、偏見を拒み、間違っていることにはノーと言い切る強さがあるならば、きっと世の中の人は変わっていくはずよ。アイヌへの認識が大きく

変わるはずよ」
「どうしてそれを私に求めるのですか？」
百合子とまっすぐに向き合った。
「あなた方和人が私たちアイヌをどう思おうと、それはあなた方の問題です。誰が何を思おうと、私の人生は何一つ変わりません。ただ己に与えられた日々を生きるだけです」
今すぐに帰りたいと思った。
北海道に帰りたい。
私の山、私の川。私の家族。私の愛おしい人たち。
私のいるべき場所は北海道だ。愛する人々の暮らす、あの貧しくみすぼらしく悲しみに満ちた＊10アイヌコタンだ。それの何がいけない？
私には故郷から遠く離れた東京の博覧会で、浅はかな者が浅はかに思い付いた北海道館の光景に憤っている時間なんてないのだ。
「……その灰色の靄って、あの世への入り口なの？　アイヌの間にはそんな言い伝えがあるの？」
しばらく黙ってから、百合子がしゅんとした様子で訊いた。
「いいえ。皆目わかりません。気が落ち込んでいるときは死神のようにも見えますし、前向きなときには、ただの目の疲れにも思えます。ですが、いつでもどこでも、少し気を抜くと現れてしまうのは同じです」
「面白い言い方をするのね。なんだか可愛らしいわ」
百合子が力を抜いて笑った。
「今もここにあるの？」
傍らに目を向ける。
「もう見えません」
「どこにいっちゃったのかしらね」
百合子はぼんやりと目を泳がせてから、気を取り直したようにハンドバッグを握り直した。
「引き留めて悪かったわね。そのアイスクリームもう駄目ね。新しいものを弁償させていただくわ。そこで待っていてちょうだいね。すぐに、すぐに戻るから」
止める間もなく大股の早足で歩き出す。

紙皿の上で春先の雪だるまのように力を失ったアイスクリームを、幸恵はじっと見つめた。
指先で掬ってぺろりと一口舐める。
⑥今まで食べたものの中でいちばん美味しかった。

（泉ゆたか『ユーカラおとめ』）

（注）
＊1　アイヌ……東北地方以北を中心に居住した、日本列島の先住民族。
＊2　静江……金田一の妻。
＊3　あの日……百合子が、自分を否定的に評する金田一の言葉を直接聞いた日。
＊4　狼狽……あわてふためくこと。
＊5　モダーン……現代的。
＊6　雑駁……まとまりのないさま。
＊7　和人……（アイヌから見て）日本人。
＊8　ユーカラ……アイヌに口伝えで受け継がれてきた文学。
＊9　カムイ・ユカラ……アイヌの神様の物語。
＊10　アイヌコタン……アイヌの集落。

問一　――線部①「普段よりも陽気に振舞ったり、道化のようにはしゃいでみせた挙句、百合子が帰る頃には観念したように不機嫌になった」とありますが、このときの金田一の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　来客に喜んで調子に乗り、いつもの真面目な様子から打って変わってふざけていたところを百合子から冷たくされ、気まずく思っている。
イ　好意的なふるまいによって百合子に陰口は聞き間違いだと思わせることに成功したが、以前のように自己中心的なおしゃべりを続けられ、うんざりしている。
ウ　陰口を言っていないと思わせるために明るく接していたが、目論見がはずれ、当てつけのようにその場にい続ける百合子にいら立っている。
エ　自分に嫌われているという百合子の誤解をとくために一生懸命もてなしたが、百合子が頑なに敵意を向けてくるので諦めている。

問二　――線部②「私に頼んだのが大きな間違いね」とありますが、なぜ百合子は間違いだと思っているのですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　編集者は百合子の記事によって博覧会を成功に導きたがっているが、記事を読んだ感想は読者にゆだねられているため。

イ　編集者は博覧会の魅力を人々に伝える記事を書くことを求めているが、百合子にはその文才がなく期待にそえないため。

ウ　編集者は博覧会について、百合子に独自性のある記事を書かせたがっているが、浅はかな人々には理解されないため。

エ　編集者は博覧会を称賛する記事を書くことを求めているが、実際に見てまわった百合子は否定的な考えを持ったため。

問三　――線部③「気の置けない調子」とありますが、どのような様子なのですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　百合子らしい話しぶりをおもしろがり、幸恵自身も素直に返答している様子。

イ　百合子の批判を聞き、異なる考えを持つ幸恵が隙を与えないように言い返している様子。

ウ　百合子と考えが違うことを幸恵が残念に思い、落ち込んでつぶやいている様子。

エ　百合子が得意げに話している中に矛盾を見つけた幸恵が、指摘してやろうとする様子。

問四　――線部④「幸恵さん、あなた悔しくないの？」とありますが、幸恵と百合子の考えの違いをまとめたものとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　百合子は幸恵が人々から神聖化され、自分よりもてはやされていることを心の中ではうらやましく思っているが、幸恵は人々からの期待に押しつぶされそうになりやめてほしいと思っている。

イ　百合子は、アイヌを見下したり好き勝手に持ち上げたりする人々に対して間違っていると怒っているが、幸恵はただ自分がアイヌとして生きることを大切にしたいと思っている。

ウ　百合子は当事者ではない分、アイヌについて安直な紹介をしている北海道館を冷めた目で見ているが、幸恵は自分たちアイヌについて少しでも知ってもらえるなら良いと思っている。

エ　百合子は無知な人々が幸恵の研究を本質的に評価していないことを憂いているが、幸恵はそのような人々にも寛大な心で受けとめ、時間をかけてアイヌのことを伝えようと思っている。

問五　――線部⑤「百合子は負けてたまるかという様子で、強い目で睨んでくる」とありますが、このときの百合子の気持ちとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　不吉なことを言う幸恵をたしなめると同時に、それが本当だとしても受け入れたくないと思っている。
イ　幸恵が不幸に酔った悲劇のヒロインを演じていると感じ、自分より注目を浴びていることに嫉妬している。
ウ　体調不良を理由にして、自分と差別に立ち向かってくれない幸恵をなんとか説得しようと焦っている。
エ　幸恵の病気をはじめて知り、自分も治療に協力するという熱意を見せ、励まそうとしている。

問六　――線部⑥「今まで食べたものの中でいちばん美味しかった」とありますが、これは幸恵のどういう気持ちをあらわしていると考えられますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　百合子がアイヌのことを真剣に考えていることが分かり、自分の役目を任せられると思い心から安心する気持ち。
イ　死が近づく中、金田一や春彦、百合子と博覧会で思い出に残る時間を過ごすことができてもう後悔のない気持ち。
ウ　気が強く、「和人」の立場でもある百合子に、自身の考えをまっすぐに伝え、聞いてもらうことができたので清々しい気持ち。
エ　灰色の靄が見えるようになってからずっと不安だったが、百合子と話したおかげで灰色の靄がなくなり感謝する気持ち。

問七　次の生徒たちの会話を読み、後の（1）～（3）の問いに答えなさい。

生徒Ａ「私は幸恵の言った『あなた方和人が私たちアイヌをどう思おうと、それはあなた方の問題です』という一文が印象に残ったよ。自分に投げかけられているように感じた。」
生徒Ｂ「いろいろな差別の問題について同じことが言えるかもしれない。黒人差別について、画家のバンクシーも『私は最初、ただ黙って、この問題について、黒人の声に耳を傾けるべきだと考えた。しかし、なぜ、私はそうするのか。これは彼らの問題ではない。私の問題だ』って投稿していたよ。」
生徒Ｃ「［ａ］側が主体的に変わろうと動くべきだね。」
生徒Ｂ「確かに幸恵の言葉には私もはっとさせられたけれど、私はアイヌに差別意識を持っていないよ。周りにいらっしゃらないから関わったことはないけれど。」
生徒Ａ「本当にいないとは言い切れないよ。自分のルーツを言っていないだけかもしれない。」

生徒B「私はむしろアイヌの人たちを尊敬するわ。自然を大事にしていて、芸術にも秀(ひい)でていてすてきだな。」
生徒C「その考えも良くないと思う。」
生徒B「ほめているから悪いことじゃないでしょう。」
生徒C「この人たちはこういう人、って決めつけだよ。それって博覧会の観客が『南洋土人はかわいい』って言っていたのと同じでしょう。」
生徒A「 b 」とかいうのと同じということかな。」
生徒B「そうか……。良くなかったね。ごめんなさい。」
生徒C「それにしても、百合子は幸恵の話をよく聞いていてえらいよね。私は幸恵のようなそっけない言い方をされたら、聞く気がなくなってしまいそう。」
生徒A「それは良くないよ。トーンポリシングっていって、口調や言葉選びを問題視することで論点がずれてしまうって習ったよ。」
生徒B「差別の問題は差別する側の問題なんだよね。じゃあ差別されている側は、差別する側が問題意識を持つまで待たなくてはいけないの？」
生徒C「差別する側が変わるべきなのだから、差別される人に『そちらが声をあげなくてはいけない』と言うのはお門違(かどちが)いだと思う。でも差別される人が声をあげないと、自分たちが差別をしていることに気づかない、差別の存在を知らないというケースも多いよね。とりあえず、差別される人の口をふさいではいけないよね。」
生徒A「声に気づいたらすぐ動かないとね。そして差別される側が声をあげる前に、自分たちがしている差別を自覚して改めていける人間でありたいな。」
生徒B「国語の授業のグループ発表で、この作品を紹介しつつ、差別のない社会のあり方について発表しない？」
生徒C「いいね。方向性をまとめていこう。」

(1) a に入る語句として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。
ア　エキスパート　　イ　マイノリティ　　ウ　インフルエンサー
エ　マジョリティ　　オ　アーティスト

（2） b にあてはまるものとしてふさわしいものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　A型だから、きちょうめんだ

イ　校則を破ったため、しかられる

ウ　リーダーシップがあるから、部長に選ばれる

エ　学生時代に野球部だったから、根性がある

（3）――線部「まとめていこう」とありますが、このあと生徒たちが話し合いをまとめた場合、どのようなものになると考えられますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　差別されている人たちはなかなか声をあげづらいかもしれないが、私たちはそれを根気強く待ち、耳をかたむけるべきである。周囲が先に動いてしまうと良からぬ方向に動いてしまうかもしれないからだ。百合子はまさにそういう先走っている人で、もう少し幸恵に発言の機会を与えるべきである。

イ　差別をなくすためには、差別をされている人たちの良いところを見つけ、どんどん賞賛するべきである。誰（だれ）しも良いところがある人間を差別しようとはしないからである。幸恵も、アイヌの魅力（みりょく）であるユーカラを人々に理解してもらうために行動して、博覧会の展示も好意的にとらえていた。

ウ　差別をしている人たちに対して批判をするとき、私たちはその伝え方に十分注意を払い、説得できるように努めるべきだ。百合子は正義感を持って偏見（へんけん）に立ち向かっていたが、彼女のように強い口調を使うと支持を得られず、現状を変えることは難しいと考えられる。

エ　私たちは、差別をなくしていく主体は差別される側ではなく自分たちであることを意識し、受け身にならないようにするべきだ。アイヌの差別問題をどうにかしようと必死に動いていた百合子は、問題を考える主体は「和人」であるという幸恵の視点を受け止めていた。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を一部省略しています。）

生態系の先住者

人間がやって来る前から咲いていた桜は、もともと水田世界の外部にあった。桜がいる森の世界と稲の世界は別々に分かれていた。というか、稲の世界は［A］者であり、森の世界と［B］するものであった。長い目でみれば、稲の世界は桜がいた世界を破壊していったが、それは産業化で伝統的な手工業が衰退していくような変化と比べれば、きわめてゆっくりと、*1拮抗しながら進んでいった。

土壌が崩れやすく、降水量も多い日本の環境では、水田耕作を維持するのは容易ではない。人間の手でたえず補修し補強しつづけなければならず、それでも台風や大雨、地震で一気に破壊されたりする。

水田の位置自体も固定できず、気温や降水量の変動にあわせて、あちこちに動かす必要があった。水田世界とその外部との境界線はたえず引き直され、一度消滅した森もまた復活してくる。そんなことをくり返しながら、少しずつ水田は拡大されていった（井上智博「弥生時代の水田稲作」松木武彦・関沢まゆみ編著『水と人の列島史』吉川弘文館、二〇二四年など）。

そうした営みをつづけながら、人間の世界の外で咲く桜を、人間たちは見つづけていた。

もともと桜はその外部の、いわば山の世界で咲く花だった。春になれば、森の緑のなかの桜色の一片がはっきり見える。山から隔たった水田世界からも、ああ、咲いているな、とはっきりわかる。そんな見え姿は水田耕作が始まる前と、ほとんど変わりなかった。その意味で、桜は「咲くもの＝さくら」でありつづけた。図に描けば図Ⅰのようになる。

人に近づく桜

もう少し正確にいえば、日本列島では水田耕作は従来の生態系とは大きく異質なものだった。それゆえ、桜は以前よりもより強く、「外」として意識される。*2灌漑式の水田は、外部との間に強固な境界線を設けて守らなければ、維持できないからだ。だから稲作という産業が始まることで、桜は人間の世界の「外」として明確に位置づけられるようになった。そう考えた方がよいだろう。

けれども、その関係もさらに少しずつ移ろっていく。森に侵入した人間たちは木を伐り、空き地を造っていく。その多くは水田や畑や水路や道になったが、残された空き地もあった。建物や灌漑施設の資材としても、燃料としても、森の木は伐られて、森のなかにもたえず空き地ができた。

森全体にとって、水田は［A］者であり破壊者であったが、桜にとってはそれだけではなかった。人間の手で空き地が造られれば、桜の生息域は拡がる。そうやって桜は人間に近い場所へ次第に移動していった。

それでも中国語圏の「桜」のように、果樹のようになることはなかった。果樹園は人間の世界の内部に、それも外部からはっきり隔離された空間として設けられる。いわば［C］だ。

日本の桜はそのような形で囲い込まれることはなかった。むしろ人間の活動を利用する形で、人間の世界に近づいていった。水田世界からみれば、桜は森の一部として外部でありつづけたが、そのなかでは身近な植物になっていった。弥生時代の遺跡ではサクラ属の*3核が各地で見つかっている。採集して、持ち帰って食べたのだろう。

山から降りる花

森のなかに少しずつ水田が侵入していくのにあわせて、桜の方もただ「見られる」外部から、次第に身近な「外」になっていく（図2）。水田世界の人々からみれば、それは、山の桜が山を降りて近づいてきた、山の神が自分たちに実りを授けるために来てくれた――そんな徴しに見えただろう。いや、そんな徴しだと信じたかっただろう。

（　中　略　）

実際には、人間たちが山の世界に侵入して、従来の生態系を大きく*4攪乱した。そのなかで桜は新たな環境へ適応していった。その結果にすぎないが、人間からすれば、遠目で見ていた「さくら」がいつのまにか、自分たちの近くで見られるようになった。まるで森から自分たちの方に近づいて来てくれたかのように思えただろう。

人と桜の結びつき

おきた出来事を自分に都合よく再解釈するのは、人の常であり性でもある。日本列島の再生力の高い森に囲まれて、その逆襲＝逆侵入に怯えつづけてきた人々も、自分たちに近づく桜を、「森と和解できた」「森からの赦しを得られた」徴しだと信じたかったのではないか。『古事記』の神話で、*5木花之佐久夜毘売が*6天津神の御子*7ニニギノミコトに*8国津神との密通を疑われ、産屋に自ら火をかけて証しを立てるのも、そんな願望の裏返しかもしれない。

「山の神が田の実りを予祝してくれる」。水田耕作が従来の生態系を破壊していった歴史からすれば、①*9倒錯した観念だといわざるをえないが、それが広く信じられ、「自然を愛する日本人」のような自己像まで生み出していった。その背景には、水田耕作という新たな産業を基軸にした暮らしをせざるをえなくなった人々の、切実で、そしてどこか切ない想いがあったのではないだろうか。

異なるか異ならないかが異なる

奈良時代の少し前、中国語圏の花の文化と本格的に接触する前の、桜と人との関係はそのようなものだったと考えられる。日本のさ

くらと中国の「桜」はそこで大きく異なる。

中国語圏では、少なくとも＊10文献史料が残された範囲では、桃も李も梨も杏も、そして梅も桜もすでに果樹として栽培されていた。野山には自生しているものも多かったが、果樹園のような、人間世界の囲い込まれた空間で育つ品種も開発されていた。

最も遅かったのは桜だろうが、＊11楊雄の『蜀都賦』でその花が具体的に描かれたときには、果樹になっていた。桃や杏の果樹化が先行し、梅や桜はそれに加わる形になったと思われるが、人間との関わり方に大きなちがいはない。「実も花も」の花として詩文に詠われ、鑑賞されてきた。（　中　略　）

そもそもそこで日本語圏と中国語圏の花の歴史は大きく異なる。**人間との関わり方や関わってきた時間が、桜と桃や梅とで異なるのか異ならないのか**。そこで二つの社会と文化は異なる。さくらと「桜」が植物の種類で異なるわけではない。一章3で述べたように、むしろ桜(桜桃)が植物としてはほぼ同じで、かつ同じく鑑賞されていたからこそ、②日本の桜が梅や桃とは異なる意味づけをもつのに対して、中国の桜が梅や桃と同じ意味づけをもつ、というちがいが大きな意味をもつのである。

（　中　略　）

文化の重層と接続

日本のさくらは生態系の先住者であり、人間世界の「外」にあるものだった。一方、桃や梅は水田耕作とともに普及し、その花は人間世界の「内」にあった。第五章の結論を先取りしていえば、日本語圏の桜は、時代によって少しずつあり方を変えながら、現在もそうした性格を保ちつづけている。そこが桃や梅とは異なり、中国の桜のあり方とも異なる。

そうしたあり方の上で、中国語圏の花の文化との接触がおきる。それによって新たな変化が生じてくるが、それ以前がどうだったかがうまくとらえられないと、そこで何が生じたのかもわかりにくい。

何がおきたのか、それ自体に関しては、折口がすでに答えを出している。私もそれが正しい答えだと考えている。花を「鑑賞する態度」が入ってくるのである。これもより正確に述べておこう。

花を見る営み、それを景物の一つとして楽しむ営みは、おそらく歴史を遡れるかぎり、つねにありつづけてきた。木であれ、草であれ、花が咲く全ての土地でなされてきたのではないだろうか。

それに対して、花を主題として意味づけて鑑賞する文化は、どんな社会にも見出されるものではない。特定の空間の、特定の時代に出現してくる。それゆえ、その歴史はそれぞれの社会によって異なる。

東アジアの花の文化を考える上で重要なのは、この花を主題として鑑賞する営みのなかに二つの種類があることだ。「実も花も」を主題として意味づけるものと、「花だけ」を主題として意味づけるものだ。

二系統の花の文化

第二章でみてきたように、東アジアでは、「花だけ」を鑑賞する文化は八世紀前半にその姿を明確に現わし、東アジア全域に拡がっていく。それは中国語圏の伝統的な花の文化とは異なる、新しい文化であった。

日本語圏では、花を主題として意味づけて鑑賞する営み自体が、新しいものだった。その対象としてまず梅が見出され、その一世代後に桜が主題として詠われるようになる。その一方で、「花だけ」を見ることは以前からなされていた。③桜は「咲くもの」として見られつづけてきた。

それゆえ、鑑賞する態度が定着すれば、「花だけ」を鑑賞する文化は急速に普及し、深く浸透していったと考えられる。そのなかで「咲くもの」だった桜が詩文とも強く結びついて、春を象徴する花として圧倒的な重みをもつことになった。

中国語圏では「実も花も」の形で意味づける伝統的な文化もしっかり残り、その伝統に連なる桃や梅は、新たな「花だけ」の花である牡丹とともに、代表的な春の花でありつづけた。桜も鑑賞される花という性格を強めながら、春の花の一つでありつづけた。

言葉で囲い込む

それに対して日本語圏では、従来の「咲くもの＝さくら」に順接する形で「花だけ」を鑑賞する文化が接続していった。とはいえ、④「見られる」花から「鑑賞される」花への変化は決して小さなものではなかった。主題として明確な意味をあたえることは、人間の世界の内部に明確に取り込もうとすることでもあるからだ。

中国語圏の桃や梅や桜も、もともとは山野に自生し、人間の世界の外にあったと考えられる。それらの果実に注目して、食料にしていった。より大きく、より美味しいものにするだけでなく、自家不和合性という遺伝子の多様化メカニズムも、できるだけ無効化していった。それには気が遠くなるような時間がかかっただろう。氷河期に分布域が大幅に狭められたことで、自家不和合性が弱まった樹が生き残り、それがたまたま発見されて、品種改良されていった――そのような偶然もあったのかもしれない（土松隆志『植物はなぜ自家受精をするのか』慶應義塾大学出版会、二〇一七年）。

「鑑賞する態度」は、そうした生態系での位置づけの変化とも対応している。「鑑賞する」ことは、詳細に観察して濃密な言葉で表現することで、人間の世界に囲い込む試みでもあるからだ。中国語圏では、書や*12韻も花の鑑賞の一部だった（袁宏道「瓶史」佐藤武敏前掲二三八～三九頁）。

「鑑賞する態度」を取り入れることで、日本語圏の花の文化もそういう性格をもつようになった。例えば大伴家持の弟である書持は花が好きで、野山で咲く花を見かけると、自宅の庭に移して楽しんでいた。「この人、性となり、花草花樹を好愛して、多く寝院の庭に植ゑたり。故に「花薫へる庭」と謂ふ」（『万葉集』巻一七 三九五七）。書持を＊13悼む＊14哀傷歌に出てくるのは「萩」だが、桜もあっただろう。そうやって「山の桜」を少しずつ「宿の桜」にしていった。

それとともに桜との接し方もやはり変わっていった。桜は「外」の性格をもちつづけたが、「鑑賞される花」になることで、内部化する力に強くさらされるようになった。そうやって身近な「外」からさらに内側へ、「外」と「内」の境界線上へ動いていった（図3）。

二種類の「花だけ」

そこまで考えると、［D］にも二種類あるのかもしれない。

一つは中国語圏の牡丹のように、人間によって作り出されて、育てられ、増やされる花だ。庭園で生まれ、育ち、増殖される。その全てが人間の世界の内部で完結する。果樹と同じように、いや果樹以上に、人間世界の完全に内部にある。

そうした［E］は、果樹ではないというよりも、究極の果樹だといった方がよいかもしれない。いわば食用の実をつける必要すらない果樹だ。それゆえ、表面的には［F］と対照的に見えるが、むしろ［G］の意味づけの発展形にあたる。「実も花も」の意味づけをさらに内在的につきぬけたものだ（図4）。

それに対して日本語圏の桜は、人間の世界の内部に完全に入り込むことはなかった。まだなっていないのか、ならない方向の力が働いたのかはともかく、人間の世界の外部という性格をもちつづけた。鑑賞される対象として濃密な言葉に囲い込まれても、完全には＊15包摂されなかった。

そういう意味で、日本の桜は［H］。水田耕作が始まる前から「見られる」花でありつづけ、その延長上に鑑賞される花にもなった。勝木俊雄が述べているように、日本列島で自生していた桜、ヤマザクラととりわけ大島桜が、サクラ属のなかでも大きな花をつけることも、その理由の一つになっただろう（勝木前掲一六一頁）。日本の野山では特に目立つ花だった。

一方、桃や梅など、水田耕作に前後して入ってきた花々は、まさにその経緯によって、人間の世界の内部にとどまりつづけた。「実も花も」の花であったことも、そうなった要因の一つだろう。一〇世紀以降に入って来た牡丹も、そうした人間世界の内部の花の一つになった。「内なる内」という中国語圏での意味づけからも、それがおさまりのよいあり方だった。

（佐藤俊樹「桜とは何か　花の文化と『日本』」）

（注）＊1　拮抗……勢力がほぼ等しいものが、たがいに対抗して張り合うこと。
＊2　灌漑……農地に水を人工的に引き、供給すること。
＊3　核……植物の果実の中心にある硬い種子の部分。
＊4　攪乱……かき乱したり、混乱させたりすること。
＊5　木花之佐久夜毘売・＊6　天津神・＊7　ニニギノミコト・＊8　国津神……いずれも日本神話に登場する神。
＊9　倒錯……ひっくりかえり、本来のものと正反対の形をとって現れること。
＊10　文献……書物や文書。
＊11　楊雄……中国の学者の名前。『蜀都賦』は、楊雄が書いた作品の名前。
＊12　韻……詩歌のこと。
＊13　悼む……死を嘆き悲しむ。
＊14　哀傷歌……人の死を悲しみ、悼む歌。
＊15　包摂……一定の範囲の中に包みこむこと。

問一　A・B に入る言葉として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　A＝部外・B＝共存
イ　A＝侵入・B＝対立
ウ　A＝先導・B＝対抗
エ　A＝開拓・B＝共栄
オ　A＝当事・B＝独立

問二　C に入る言葉として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　外部のなかの内部
イ　外部のなかの外部
ウ　内部のなかの外部
エ　内部のなかの内部

問三　――線部①「倒錯した観念だといわざるをえない」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　水田耕作の拡大のために森の世界に人間の手が入り、生態系が破壊されてしまった。そのため、桜は果樹としての働きを失い、人間に近い場所で単に見られる木になったのであり、田の実りを告げるために桜の方から人間に近づいてくれたと考えるのは、身勝手な解釈だから。

イ　水田耕作の拡大のために森の世界に人間の手が入り、生態系が破壊されてしまった。そのため、土壌が崩れやすくなり、水田耕作を維持するためにたえず補修をしなければならないのであり、森が破壊者として人間の世界を混乱させていると考えるのは、空想的な解釈だから。

ウ　水田耕作の拡大のために森の世界に人間の手が入り、生態系が破壊されてしまった。そのため、森からは収穫できないので、水田耕作に専念することとなり、収益が増えたのであり、田の実りの豊かさを山の神のおかげと考えるのは、空想的な解釈だから。

エ　水田耕作の拡大のために森の世界に人間の手が入り、生態系が破壊されてしまった。そのため、桜は新しい環境にうまくあわせ、人間に近い場所にまで生息域を広げたのであり、田の実りを告げるために桜の方から人間に近づいてくれたと考えるのは、身勝手な解釈だから。

問四　――線部②「日本の桜が梅や桃とは異なる意味づけをもつのに対して、中国の桜が梅や桃と同じ意味づけをもつ、というちがい」とありますが、具体的にどういうちがいですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　日本では、桜は水田耕作よりも前から存在し、梅や桃は水田耕作とともに普及したのに対して、中国では、桜も梅も桃も水田耕作とともに普及したというちがい。

イ　日本では、桜は水田耕作よりも前から存在し、梅や桃は水田耕作とともに普及したのに対して、中国では、桜も梅も桃も水田耕作よりも前に存在したというちがい。

ウ　日本では、桜は「実も花も」鑑賞し、梅や桃は「花だけ」を鑑賞するのに対して、中国では、桜も梅も桃も「花だけ」を鑑賞するというちがい。

エ　日本では、桜は「花だけ」を鑑賞し、梅や桃は「実も花も」鑑賞するのに対して、中国では、桜も梅も桃も「実も花も」鑑賞するというちがい。

問五　――線部③「桜は「咲くもの」として見られつづけてきた」とありますが、これに分類される桜とはどのようなものですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　人間がやってくる前から日本に存在し、春になると咲くものとして捉えられ、見られていたもので、中国語圏の花の文化と本格的に接触する前の桜。

イ　人間がやってくる前から日本に存在し、春になると咲くものとして捉えられ、見られていたもので、山にだけ生息していた水田耕作が始まる前の桜。

ウ　人間がやってくる前から東アジアに存在し、春になると咲くものとして捉えられ、見られていたもので、花を主題として鑑賞する文化が見いだされる前の桜。

エ　人間がやってくる前から東アジアに存在し、春になると咲くものとして捉えられ、見られていたもので、「実も花も」を主題として意味づける前の桜。

問六　――線部④「『見られる』花から『鑑賞される』花への変化は決して小さなものではなかった」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　見られる対象である点では大きな変化はないが、鑑賞するという中国の思想が入ることで、日本の伝統的な文化が姿を消し、中国語圏の文化に近づくのは大きな変化であるから。

イ　見られる対象である点では大きな変化はないが、鑑賞するという中国の思想が入ることで、桜の「花だけ」でなく、「実も花も」鑑賞する対象とし、詩文や書にするのは大きな変化であるから。

ウ　見られる対象である点では大きな変化はないが、鑑賞とは人間世界に囲い込むことであり、人間世界の「外」にあった桜と、人間世界との距離が近づくのは大きな変化であるから。

エ　見られる対象である点では大きな変化はないが、鑑賞とは人間世界に囲い込むことであり、人間の手が加わって品種改良されることは、それまでの生態系を変える大きな変化であるから。

問七 D ～ G に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

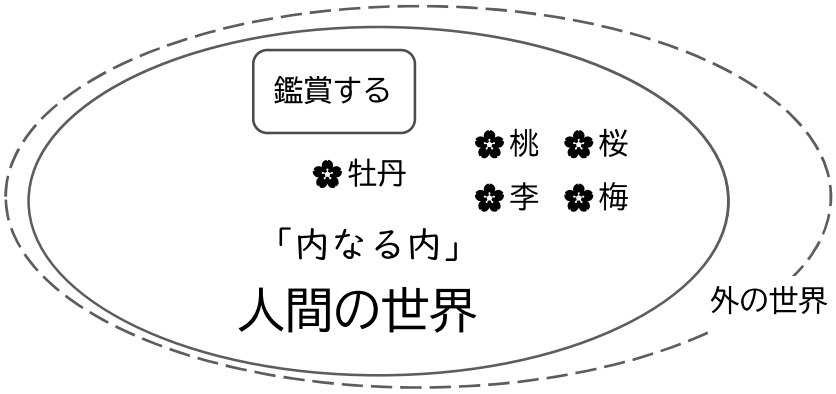
ア D「花だけの」花 E「花だけの」花 F「実も花も」 G「花だけの」花
イ D「花だけの」花 E「花だけの」花 F「花だけの」花 G「花だけの」花
ウ D「花だけの」花 E「花だけの」花 F「実も花も」 G「実も花も」
エ D「実も花も」 E「実も花も」 F「花だけの」花 G「花だけの」花
オ D「実も花も」 E「実も花も」 F「花だけの」花 G「実も花も」

問八 H に入る文として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

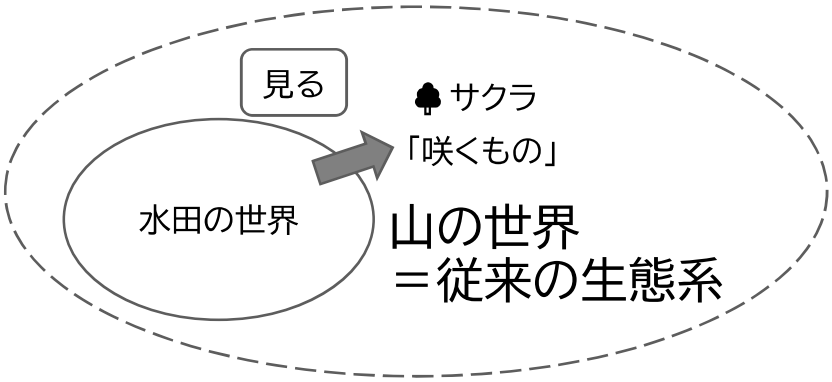
ア 最も遠い「外」として、人間世界の完全に外部にありつづけた
イ 最も遠い「内」として、人間世界の完全に内部にありつづけた
ウ 最も近い「内」かつ最も遠い「外」として、内／外の境界線上にありつづけた
エ 最も近い「外」かつ最も遠い「内」として、内／外の境界線上にありつづけた

問九　═線部「図1」・「図2」・「図3」・「図4」にあてはまるものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

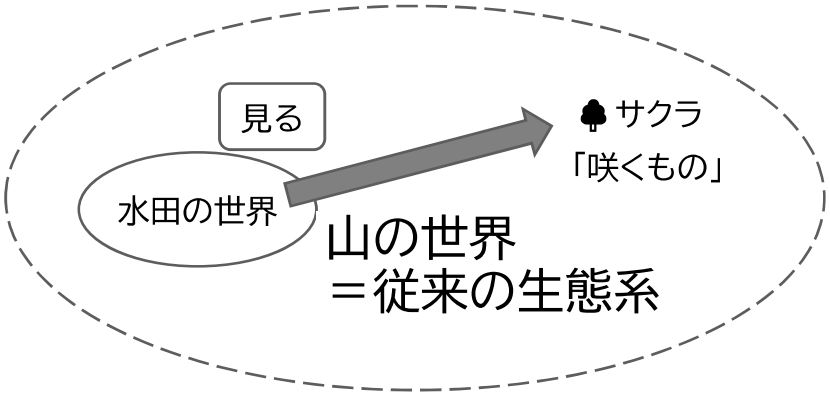
ア



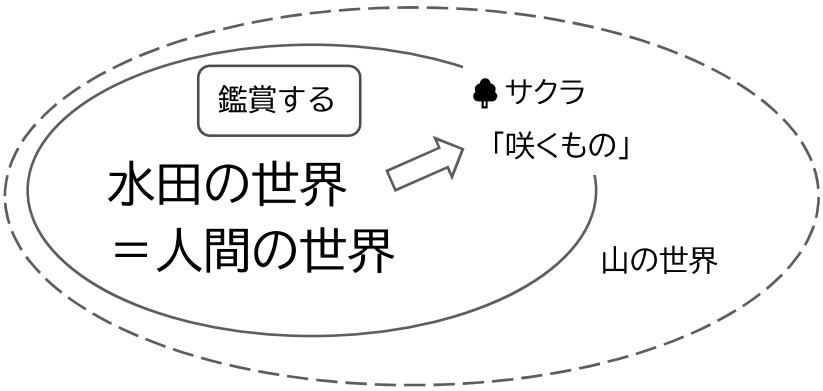
イ



ウ



エ



（おわり）

二〇二六年度
湘南白百合学園中学校入学試験

国語解答用紙

受験番号

□□□□番

氏名

得点

※

※には何も書かないこと

一

問一

①	②	③	④	⑤
⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

う

問二

問三

A

↓

B

↓

問四

(1)

(2)

問五

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

※

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

(1)

(2)

(3)

※

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

図1

図2

図3

図4

※